『精神現象学』における「自己 das Selbst」(二)

―― 無限性とカテゴリー ――

川崎医療短期大学　一般教養

佐々木　寛　治

(平成２年10月13日受理)

Das Selbst in „Phänomenologie des Geistes“ (2)

―― Unendlichkeit und Kategorie ――

Kanji SASAKI

Division of General Education
Kawasaki College of Allied Health Professions
Kurashiki, 701-01, Japan

(*Received on October 13, 1990*)

概　　要

「無限性」の境位における「自己意識」はすでに抽象的には「カテゴリー」である。「無限性」はこうして『Ⅳ』に接続するだけでなく『Ⅴ』にも接続する。

無限な意識に三位一体が認められ，[a.] 即自なる意識，[b.] 知，[c.] 対象の即自とその対他存在の意識に対する同一がこれである。この第三項，媒語はすでにカテゴリーであるといってよく，経験的意識の第三項，つまり意識内部の「対象」と「知」の比較の活きと重なりあう。この比較の活きが破綻したその場で，「われわれ」からすれば，カテゴリーが，従って，無限な意識の第三項が対自的に成立する。カテゴリーが「意識に対して」も存在するためには，意識はレアリテートへの道を歩まなければならない。これがカテゴリー論の自己意識論に課す課題である。

このように『Ⅳ』が『Ⅴ』に強く制約されることによって，そしてまた「己れのみを意識する存在」へのヘーゲルの反発と相俟って，この時期の自己意識論の独自の展開が抑圧されたものと推察される。

Resume

Das Selbstbewnßtsein im Element der Unendlichkeit ist schon abstrakt die Kategorie. Die „Unendlichkeit“ führt direkt nicht nur in Kap. Ⅳ, sondern auch in Kap. Ⅴ.

Die Trinität des unendlichen Bewußtseins ist dies; das Bewußtsein als Ansich, das Wissen, und die Identität für das Bewußtsein des Ansichs und Für-ein-Anderes Seins des Gegenstandes. Dieses Dritte oder diese Mitte ist die Kategorie. Und parallel ist es mit dem Dritte des erfahrenden Bewußtseins, nähmlich dem Vergleichen zwischen dem Gegenstand und dem Wissen. Wenn dies Vergleichen mißlugen ist, dann steht „für uns“ die Kategorie, *und also* das Dritte des unendlichen Bewußtseins. Damit die Kategorie auch für das Bewußtsein wird, muß es seinen Weg zur Realität gehen. Das ist die Aufgabe,

welche die Kategolienlehre auf die Selbstbewußtseinslehre setzt.

Kap. Ⅳ steht unter schweren Bedingungen von Kap. Ⅴ. Hegel als Verfasser der „Wissenschaft der Erfahrung des Bewußtseins", nicht der der „Phänomenologie", und dem persönlich das nur-sich-selbst-bewußte Sein nicht gefällt, könnte daher die Selbstbewußtseinslehre in ihrer eigenen Gestalt nicht genug entwickelt haben.

序

1807年に確立をみた『精神現象学』(1)では，『Ⅰ　感覚的確信』*1『Ⅱ　知覚』『Ⅲ　悟性』『Ⅳ　己れ自身の確信の真理』と続き，冒頭三章が『A　意識』として一括されるとともに，第四章は『B　自己意識』とも記されている。テキスト本文で『A』から『B』への移行の原理となっているものは「無限性」*2，であるが，そこから導出されたかぎりの「自己意識」を筆者は「無限性」の境位における「自己意識」と名付ける。ヘーゲルは「自己意識とともに，われわれは真理の本来の家郷に歩み入ったのである」(138)*1という。そのような意義を孕むものであるかぎりにおいてしか，彼には「自己意識」を受け止めることができなかったというべきであろう。事に当たって自我を意識することを己れのモラルに反することと感受する，牢固とした社会性が彼にはあるからである(2)。『Ⅳ　己れ自身の確信の真理』というこの章の標題そのものが，一面でこの社会性からする彼の批判を示していると考えられる。

「無限性」という概念の開示とその彫琢――この目的の遂行なしにはこの箇所を執筆している当時のヘーゲルにとっては「自己意識」は語り得なかった。筆者には冒頭三章全体の豊穣で稠密な論理が，挙げてこの目的に向けたヘーゲルの思索の，鬼気迫る努力の結晶であるとすら思われる。ここでの「意識」から「自己意識」への移行の論理は極めて強力であり，後者の導出として説得的である。

しかし，『Ⅳ　己れ自身の確信の真理』から『Ⅴ　理性の確信と真理』への移行，「自己意識」から「理性」への上昇はどうだろうか。欲望論，生命論，相互承認論，主奴論，不幸な意識論ならびにこれへの過程，これらはそれぞれに並々ならぬ思索の奥深さを示し，これを読む者の思考を挑発して止まない。しかし『Ⅳ』から『Ⅴ』への移行の論理に限ってみればその叙述はどうか。確かにそれは一方の側面からは「外化の論理」として，他方の側面からは「忠言」たる「媒語」として，こうしてつまりは「カテゴリー」として語り出されてはいる。しかしこれらは，「無限性」が『Ⅲ』を『Ⅳ』へと強力に運び移しているのに比較すれば，『Ⅳ』から『Ⅴ』へ転轍しうる顕在的な内容としては不十分にしか展開されていないように思われる。その最大の原因は『Ⅲ』がむしろ『Ⅴ』へも直結しているとも見られうることに関わっているのではないか，と筆者は考えている。それは『意識の経験の学』として当初に予定された論理世界を，『緒論』の意識原理論と『Ⅴ』カテゴリー論によって張り渡されたものと見るべきであるということをも意味する。このような角度から「無限性」「自己意識」「カテゴリー」を検討してみることが本稿の課題である。

なお，1805年初夏に『意識の経験の学』として書き始められ，1807年１月には『精神現象学』として脱稿を迎えることとなったこの著作の中に，筆者はひとつの位相差をみている。顕在的には『Ⅵ　精神』以降とその前との差異がそれであるが，その差異のいま少し不分明な境界は，『Ⅴ　理性　A　理性的自己意識の己れ自身を介する現実化』序説部分にあると考えられる。ここでの，「人倫」「道徳性」のいずれを叙述の「目標」とみるべきであろうかという反復される議論が，「精神の概念」への言及をふくめ，ヘーゲルの迷いを，つまりこの著作の篇別構成をどのように仕上げるべきかについての彼の模索を，表していると思われる。――それのいわば起爆ともなるものは，おそらくは「自己 das Selbst はひとつの物である，という無限判断」(260) であるだろう（そしてその導火線となっているのが，『Ⅳ』での予定を越えた意識深部への下降，「精神の概念」をめぐる格闘の開始だろう）。というのも，一方でヘーゲルは「自己 das Selbst」を術語として確立する作業を，この著作を執筆している過程でそれと並行して，進めていっていたことが推察できる[3]。他方でテキストは，「自己 das Selbst」（以下，〈自己〉と表記）の成立をもって「精神的実在」の「精神」への転化としている。つまり「精神」は「意識の〈自己〉」であり，この〈自己〉は実体を意識として現実化させ己れの世界の表象＝定立と忘失＝解体を為すものとして実体の意識的運動の原理（その始・中・終）である（324ff. auch 26）。しかもこの〈自己〉は『Ⅵ　精神』全体を貫く叙述展開の原理となっていて，その点では『Ⅴ　理性』における「カテゴリー」の位置を占めるものである。上述の，意識原理論とカテゴリー論によって張り渡された理論世界はすでに『Ⅳ』において深刻な亀裂を蒙り初め，やがて『意識の経験の学』は『精神現象学』のうちに包摂される。

上に筆者がいう「位相差」は，ヘーゲルによるこの〈自己〉の術語化の作業と不可分であろう。ただし，この「位相差」をもって直ちに著作内部の決定的な断絶とみなすべきではないと思われる。

第一章　「無限性」と「自己意識」

『意識の経験の学』における「知」の「目標」は「知がもはや己れ自身を越えて彼方に行く必要のない地点，そこでは知が己れ自身を見出し sich selbst finden 概念が対象に，対象が概念に合致する entsprechen 地点」(74) であると，『緒論』のヘーゲルはいう。さらにはこの学の「叙述」とは「真なる知 das wahre Wissen にまで突き進む自然的意識の道程」であり，「あるいは己れが己れ自身において何であるか was sie an sich selbst ist の知解に到達して」「己れを精神にまで浄化する」「魂の道程」(72) であるとも当時の彼は記している。彼はテロスとして絶対的な自己知を掲げるが，いわゆる自己絶対化から一線を画するかのようにして，エートス上の敬虔主義ともいうべき響きを込めて語っている。引用にあたり筆者が傍点で強調しておいた「あるいは」以下の付加は，そのように聞こえる。それは『Ⅷ　絶対知』で，「美しい魂」が「己れ自身の知」であり「神的なもののたんなる直観ではなく，神的なものの自己直観 Selbstanschauung」だと語る彼に，まだなおどこか共鳴するところがある。最初に引用したよ

うに，ヘーゲルは「自己意識とともに，われわれは真理の本来の家郷に歩み入ったのである」と語る。そのとき彼が考えている「自己意識」とは，テロスとしての絶対的な自己知の可能な場である限りの「自己意識」以外ではありえない。「無限性」において「自己意識」が生成してくる過程を総括してヘーゲルは次のように述べている。

> われわれの見るところでは，・・・*3 現象の内なるものにおいて悟性は真実には・・・その絶対的普遍的な諸契機とその運動における遊戯としての現象そのもの以外のものを経験しているのではなく，実際には己れ自身をのみ経験しているにすぎない。知覚を越えて高まって，意識は現象という媒語を介して超感覚的なものと推理連結されたものとして現れてくる。この媒語を介して意識はこの［超感覚的なものという］*4 背景［背後の根拠］を観ているのである。この際の両極の一方は純粋な内なるものという極であり，他方はこの純粋な内なるものを観ている内なるものという極である。しかしいまやこの両極は相い合してしまい，極としての両極は消失し，だからまたこの両極とは何か異なるものとしての媒語も同様に消失してしまっているのである。こうしてこの幕が内なるものの前から取り払われて，内なるものが内なるもののうちへと観る活きが成立している。これは区別されえざる同名のものの観る活きである。つまり，区別されえざる同名のものは，［えざる *un* の否定性により］自分を自分から排拒して区別された内なるものとして定立するが，それとともにただちにこの両者の区別されていないことが初めの同名のものに対してあるのである。こういう区別されえざる同名のものの観る活きが自己意識である。 (135)

これは自然的意識にとっては「自己意識」のいわば神的とさえいえる起源を述べようとするものであり，それにとってはまさに「かの時」の face to face であろう。因みにコリント前書13－12をルター訳の翻訳で掲げておく。

> わたしたちは今は鏡を介しおぼろげな言葉の中で見ている。しかしかの時には顔から顔へとである。今ではわたしは断片的にしか認識していない。しかしかの時にはわたしは，わたしが認識されているのとちょうど同じように，認識するだろう。

ここでは「鏡を介しおぼろげな言葉の中で」，あそこでは「現象という媒語を介し」となっている。ともあれこの時期にヘーゲルが「自己意識」を，ただしその本源的な境位にけるそれを語るとき，そこにはどこかエートス上の敬虔主義ともいうべき雰囲気が漂っていることにまず注目しておきたい。

さて「無限性」の境位における「自己意識」は上のように規定された。この場面では，たとえ「自我は自我自身から自我を区別するが，そのことのうちにただちに，この区別されたものが区別されているのではないということが自我に対してあるのである。」(134f.) と述べられてあっても，それは反省的に対象となる自我を語るものではない。つまり，わたしがいま運動している物体を見ているとして，この見ている活動から対象であるこの物体を反省的に捨象したときに生ずるわたしの意識の事態が問題なのではない。むしろこの運動する物体という「現象」の中に「その絶対的普遍的な諸契機とその運動における」「現象そのもの」を観るという

のである。そこに観られる「無限性」が「意識に対してまさにそれがあるままに対象であるときに，意識は自己意識である」というのである（133）。ということはつまり，この最後の「自己意識」とはあの「わたし」と「物体」をたんなる両契機としている，両者の統一としての「自己意識」なのである。つまりヘーゲルが立っている論理レベルはすでに『V　理性』のカテゴリー論のそれなのである。

このカテゴリー論では次のように述べられている。

> 理性はあらゆるレアリテートであるという確信である。ここでの即自ないしこのレアリテートは，しかしながらまだ全くの普遍的なもの，レアリテートの純粋抽象でしかない。そもそも即自態における自己意識は対自的に［レアリテートとなるものだが］，［上で理性の確信となっている］即自ないしレアリテートは［レアリテートではあっても］むしろやっとポジティヴィテートとでもいうべきものになっているにすぎない。だから自我は存在するものの純粋本質態ないしは単純なカテゴリーでしかないのである。カテゴリーは・・・・存在するものの本質態ないし統一であるが，しかし今や思惟する現実態としてのみこうした本質態ないし統一となっているのである。つまりカテゴリーとは自己意識と存在とは同一な本質のものであると［言明する］ことである。ここに同一なというのは比較においてではなく即自且つ対自的に同一であるという意味である。（181）

「思惟する現実態」とは「自己意識」が単なるポジティヴィテートなどではなく真のレアリテートに成っている事態を指している。カテゴリー論の観点からみて，「自己意識」がレアリテートに成っていくことが要請される。この点をわれわれは第三章で検討することにする。さて上の本源的な「自己意識」は「カテゴリー」として，狭義の「自己意識」と「存在」とを二つの契機として含んでいるのである。（『Ⅳ』で最初に登場する二項はこの狭義の「自己意識」と「生命」である。）「カテゴリー」がこのように規定されていることをふまえて，「無限性」から「自己意識」を開示していく本章冒頭の引用文を読み返してみよう。「一方は純粋な内なるものという極であり，他方はこの純粋な内なるものを観ている内なるものという極」というとき，この両者が上の二つの契機と成っていく当のものである。他方，この一文の末尾で語られている「こういう区別されえざる同名のものの観る活きが自己意識である」といわれるときのこの「自己意識」は抽象的にはすでに「カテゴリー」に他ならない。

この抽象的にはすでに「カテゴリー」である「自己意識」は，機械的にいえば，個人としてのわたしを超えているものである。しかし後で意識原理論について検討するときに見るように，知と対象，確信と真理を二つの契機にする，意識の比較・吟味・探求の活きが「同名のものの観る活き」として「カテゴリー」の結構を具えているのである。つまり広義の「自己意識」の結構は狭義の一人称的自我の「自己意識」のそれとして〈内化〉されているのである。

こうして「無限性」は「自己意識」への移行の原理ではあるが，その「自己意識」とは第一義としては抽象的な「カテゴリー」なのである。この第一義から第二義として分離されたかぎりの「自己意識」が『Ⅳ　己れ自身の確信の真理』で具体的に意識形態論として叙述されるの

だが，この点をめぐる問題を次章で検討しよう。

ともあれ「無限性」の概念とは，カテゴリー論の構築に向けてヘーゲルがIch＝Ichのこのグライヒの一点を眼前に据え，ここに思索の全精力を凝縮して格闘する中から生じたもののように思われる。

第二章「自己意識」の「形態」と「無限性」

ここではまず，『Ⅳ　己れ自身の確信の真理』で「自己意識という形態がさしあたりどのように登場してくるか」(138) の，その最初歩をとりあげることにする。

(一)

「諸物の内なるものへの悟性の関係から帰結した即自ないし普遍的な結果」は「区別されえないものの区別する活き das Unterscheiden des nicht zu Unterscheidenden, あるいは区別されたものの統一」であると定式化される (139)。二重の否定を内に孕んで己れの内へと還帰しているとはいえ，「この統一は... [統一でありつつ] 同様にまた己れ自身からの己れの排拒である」。無限な統一とはじつにこのようなものである。「[統一の] かかる概念が己れを自己意識と生命との対立へと二分化する。前者は区別項が無限な統一であることが自分に対してある統一であり，後者はこの統一であるにすぎず，同時にこの統一が己れ自身に対してもある訳ではない」(139)。みられるようにこの章の最初に「形態」として登場する「自己意識」は排拒された両項の一方の側に立っているのであって，自己二分化する「無限性」の境位における「自己意識」の位置にあるのではない。「無限性」の境位における「自己意識」と『Ⅳ　己れ自身の確信の真理」における「自己意識」の「形態」とは，その身分の差がこのように歴然としているのである。そしてまた，排拒された両項としての「自己意識」と「生命」はともに「統一」ではあっても両者には対自と即自との一面的な対立がまといついていて，後者の対自への展開のみならず前者すなわち「自己意識」の即自との和解が必要とされる構造になっている。

だからここに「登場」した「自己意識」は「知の新しい形態」として「己れ自身の知」(138) と規定されてはいても，あの「無限性」において成立する「己れ自身の知」とは全く次元の異なるものである。ここで「登場」しているのは（意識の自覚面 für es で見るなら）「己れの他者の知」に対立したかぎりでの「己れ自身の知」でしかないのである。これにとっては (für es)「己れのうちで即自ないし真なるものであると告白する」(77)「対象」が，「己れの他者」から「己れ自身」へと取って替わったにすぎない。これに反しテキストで自己意識形態論が開始したこのパラグラフの直前では，ヘーゲルは「無限性」の境位における「自己意識」における知＝対他存在を踏み込んで次のように規定している。

> [ここに「成起」している「己れの真理と等しい確信」において] 対象が即自的にあるところのものを概念と呼び，他方で対象としてある，言い換えるとひとつの他者に対してあるところのものを対象と呼ぶなら，即自存在とひとつの・他者・に対する・存在とが同

一であることは明らかとなる。というのも［ここでの意識は次のような三位一体のものであるからである。つまり］［a.］即自が意識である。［b.］しかし同様にまた意識はそれに対してひとつの他者（即自）があるところのものである。［c.］そして対象の即自とこの対象のひとつの他者に対する存在とが同一であるということ，このことが意識に対してあるのである。自我は関係の内容であり，関係する活きそのものである。自我［N^0］はひとつの他者［N^+］に対抗して自我自身［N^-］であるが，しかも同時にこの他者を上から覆ってもいて，自我に対する他者が同時に自我自身［N_0］にすぎないのである。 (137f.)

ここに言及された「自我」において歴然としているように，ここでの「意識」「自我」は排拒された両項の統一としてのそれである。しかもこれが語られている論理世界とは，下に見るように明らかに『緒論』における意識原理論のそれである。（ただし［c.］の契機が自己意識論とカテゴリー論とで焦点になる。）この意識原理論では次のように述べられている。

意識は或るものを己れ自身から区別し，それに向かって意識は同時に自ら関係していく。・・・この関係する活きの特定の側面，あるいは或るもののひとつの意識に対する存在の特定の側面が知である。この「ひとつの他者に対する存在」からわれわれは即自存在を区別する。知に関係付けられたものは同時に意識によって区別されて，存在するとしてこの関係の外にも定立される。この即自の側面が真理である。 (76)

意識とは一方で対象の意識であるが，他方で己れ自身の意識である。自分にとって真なるものであるところのものの意識であり，かつそれについての自分の知の意識である。両者が同一の意識に対してあるのだから，意識自身が両者の比較なのである。対象についての自分の知がはたしてこの対象に合致しているかどうかということがこの同一の意識に対して生ずるのである。・・・意識にとっては或るものが即自であり別の契機は知ないし「対象の意識に対する存在」である，という区別，・・・こうした現存する区別に吟味は基づいているのである。 (77f.)

意識が己れのうちで即自ないし真なるものであると告白するものにおいて，意識自身が自分の知を測定するのに用いる尺度をわれわれは持つ。 (77)

意識が己れ自身を吟味する (77)

意識は己れ自身に即して自分の尺度を与える，従って探求はそのことによって意識による己れ自身との比較であるだろう。 (76)

意識自身の行なう吟味の結構は以上で明らかである。ここに「探求 Untersuchung」の unter は inter のことであり，意識内部の知と真理の二つの契機の間柄である。それはまた内なるもの，さらには基底 sub であろう。「無限性」の境位における「自己意識」について，その意識の三位一体構造を上に掲げておいたが，その［c.］の契機はこの「探求 Untersuchung」に位置し，これが完了している事態を示している。つまり意識内部の「知」と「対象」という両項の Vergleichung を，言い換えるとこの両項を等しくさせる意識の活きを，意識が遂行し終えていることを示している。しかしその際には，むしろ「カテゴリー」としての統一が前提となっていて，それをふまえて「自己意識」の統一がこのように説明できているというべきであろう。（だが果してこのような統一は維持しうるだろうか。）『緒論』は「カテゴリー」としての Ich = Ich を思索の唯一の顕在的な目標（繰返し神的なものへと上昇しようとし，その都度強力な

理論化作業により地上へと引き下げられてきたそれ）としつつ意識の原理を述べているもののように思われる。意識論を掘り下げつつカテゴリー論を絶対的なものの開示へ向けて確立していこうとすること，当初予定された『意識の経験の学』の世界はそのようなものではなかったか。

自然的意識は Unterscheidung は自覚しているが，Untersuchung はこれを意識していない。この「探求 Untersuchung」は意識自身がこれを行なうとされてはいても，この著作の叙述の上でこれを表現する「形態」が「登場」するのは，「不幸な意識」まで待たなければならない。『Ⅳ　B　自己意識の自由』でカテゴリー論から要請される課題（これを筆者は次章で検討する）が遂行されるが，それは同時に意識深部への下降の道である。それは『意識の経験の学』の予想された統一に重大な亀裂を走らせていくだろう。

（二）

①　「無限性」の境位における「自己意識」から排拒されたかぎりの「自己意識」とは，「感覚的知覚的世界の存在 Sein からの反省」「本質的に他的存在からの還帰」であり，だからまたそれは「己れを意識したる存在 Selbstbewußtsein としての運動」である（138）。そこでは「なるほど主要契機そのものが，つまり意識に対する単純で自立的な存立 Bestehen が失われてしまっているようにみえる」（138）。というのも一方で「自己意識」がそこから「反省」した「感覚的知覚的世界の存在 Sein」，すなわち「私念の存在，知覚の個別態とそれに対立した普遍態，悟性の空虚な内なるもの」（138）はすでに「自己意識の契機として，あるいは，意識に対してさえ同時に無に等しくなんらの区別でもなく純粋な消失する本性のものでしかない抽象物ないし区別として」（138）あるにすぎないからである。他方で「自己意識」がその不断の「反省」，不断の「還帰」のなかで他的存在を否定し続ける活動において己れ自身を感受しているとき，全体としてこれをみれば結局のところそれは「自我は自我である，ということの没運動的同語反復でしかない」（138）からである。実際「自己意識」が他的存在を否定するにしても，この他的存在はすでに「自己意識の契機」でしかなく，この否定において「自己意識は己れ自身としての己れ自身をのみ己れ自身から区別しているにすぎず，従って自己意識には区別が他的存在としては直接に破棄されてしまっている。区別は存在しないのである」（138）。このように，「本質的に他的存在からの還帰」として「登場」しつつある「己れ自身の知という，知の新しい形態」（138）は何よりも先ず，他的存在の廃虚の上に浮かび上がる対自 Für sich [n^0] の恐るべき純粋抽象である。（「意識」は「レアリテートへの道」の只中にいる。）

②　しかしこの「自己意識」も「無限性」になにほどか関わるものである。「区別は存在しない」と同時につぎのような「区別された契機」（138）をそれは具えているのである。「自己意識という形態」（138）はまさに「己れ自身を意識したる存在」なのであり，「区別が自己意識にとり存在の形態さえもとらないのなら自己意識は自己意識ではない。かくして自己意識

[n^-] には他的存在がひとつの存在 [n^+] として，ないし区別された契機として存在する」(138)。しかしそれと同時に「自己意識には己れ自身のこの区別との統一 [n_0] もまた第二の区別された契機として存在する」(138) このようにして，最初の〈純粋な対自〉としての「自己意識」[n^0] は，〈自己・意識〉[n^-] と〈自己・意識〉[n_0] へと展開する。前者は他的存在の意識であり，後者はそれに反定立された統一の契機であることに注目しておこう。ところで純粋な Ich＝Ich のこのような現実化・二重化はさしあたり狭義の「自己意識」の内での事態のようにみえはする。しかしヘーゲルは右の二つの「区別された契機」を挙げるや否や次のように語っている。

> かの第一の契機をもって自己意識は意識 [n^-] としてあるのであって，かかる自己意識に対し感覚的世界の広がり全体 [n^+] が保存されている。しかしこれは同時に，自己意識の己れ自身との統一 [n_0] という第二の契機に関係づけられてのことでしかない。こうして感覚的世界の広がり全体は自己意識に対してひとつの存立 Bestehen なのである。ただしこの存立は現象であるにすぎない，つまり即自的にはなんら存在ではないところの区別にすぎない。自己意識 [n^-] にとっての現象 [n^+] と自己意識の真理 [n_0] とのこのような対立はもっぱら真理のほうのみを，つまり自己意識の己れ自身との統一のほうのみをその本質とする。この統一は自己意識にとって本質的 [実在的] とならざるをえない。つまり自己意識は欲望一般なのである。 (138f.)

③ 〈自己・意識〉と〈自己・意識〉との対立は「存立」の境位における「自己意識」にとっての「現象」と「真理」との対立へとさらに展開された。「この意識は自己意識として」は今や「ひとつの二重化した対象」を持っている。一方の「感覚的確信と知覚 [n^-] の対象」[n^+]，他方の「己れ自身」[n_0] がこれである (139)。しかしこの両者が等価でありえない点が注目されるべきである。前者は「否定的なものという性格を刻印されており」，後者は「さしあたりやっと前者との対立においてあるにすぎないが」，この後者たる「己れ自身」が「真の本質」であると規定されている (139)。あるいは，この「自己意識」にとって「真理」とは「つまり自己意識の己れ自身との統一」のことであり，対立にあってはこの「自己意識の己れ自身との統一」「のみ」が「本質」なのだとされている (139)。これは『Ⅳ　A　自己意識の自立性と非自立性』に「登場」する「自己意識」に共通する根本規定である。

> 自立的な自己意識には一方で自我の純粋抽象 [n_0] のみが自分の本質なのであり，他方ではこの純粋抽象が自らを形成して自らに区別項を与えていきはしても，この区別する活きは自分にとって対象的で即自的に存在する本質 [実在] [N^+] に成る訳ではない。こうしてこの自己意識は，自分の単純態 [N^0] において己れを真実に区別する自我 [N^-，N^+]，あるいはこのような絶対的な区別において自同的で在りつづける自我 [N_0] に成るのではない。 (155)

要するに最初に「登場」してくる「形態」としての「存立」・「自立性」の境位における「自己意識」が「己れ自身」・「自我の純粋抽象」「のみ」を「本質」とすると規定されていること，この点に筆者は注目する。その訳は，『Ⅳ　己れ自身の確信の真理』であるこの章に入る直前

でヘーゲルが予め書き記していた事柄に関わるからである。彼はそこでこう記していた。「無限性の概念を無媒介にもっているような意識」が「新しい形態」として「登場」してくるが，それは「先行する諸形態のうちに自分の本質を認識するのではなく，自分の本質はこれとは全く異なるものとみなす」(134) と。つまり，ヘーゲルがこの側面から言おうとしていることは，「新しい形態」として登場したこの「自己意識」は対立を「全体」(142) として主宰する〈対自存在〉として自らを確立しはするが，しかし成立をみた「自己意識」が「自分の本質」としている「己れ自身」[n^0]，[n_0] なるものは，あの「無限性」を境位とする「自己意識」[N^0]，[N_0] という本来的なものではなく，「これとは全く異なる」ものだということなのである。こうした「自己意識」とはヘーゲルにとって，「己れを意識したる存在」ではあっても「己れをのみ意識したる存在」,「己れのみが気懸かりな存在」として自分のモラルに反する存在であったことだろう。そうした反発は『Ⅳ　B　自己意識の自由』に生ずる「自己意識」を含め，この章全体の自己意識諸形態に向けられている。

> これまでは自己意識にはもっぱら自分の自立性と自由のみが問題だったのであり，自分の本質を否定するかに見える世界と己れ自身の現実とを犠牲にして己れを己れのために救出し維持することに汲々としていた。しかし［今や］理性としては，己れ自身だと断言しつつ，自己意識は世界にも己れ自身の現実にも安らいをえていて，これらを耐え忍ぶことができる。 (178)

当時のヘーゲルにとっては「自己意識」を原理とする哲学の構築は，同時に「己れをのみ意識したる存在」への魂の転落の危険からの防御（敬虔主義）を不可避のものとしたかのようにみえる。危険の淵が彼の社会性に強く迫るからこそ，彼の思索は自己意識論に強靱な普遍性を要請せざるをえなかったし，だからこそ「無限性」の概念の確立もありえたといえるだろう。そうしてこの「無限性」を境位とする「自己意識」に比較して「形態」としての「自己意識」をヘーゲルは否定的にしか登場させえなかった。一方で「無限性」の概念の強烈な確立により無限な統一の強靱さに信頼しえると思えたこと，ないしここから「カテゴリー」の導出へ向けて叙述を絞っていくべきことが要求された（そうだとすれば統一が維持できるだろうとする信頼がやはりあったことになる）こと，他方「形態」を否定的に位置付けざるをえない自分の社会性が「形態」を更に踏み込んで分析することを妨げたこと，恐らくはこの両者が相俟ってこの時期のヘーゲルをして，意識の一層深部に口を開けている亀裂を更に対象化し続けることを抑圧させたように思われる。

上掲の無限な意識の三位一体の［c.］に現実に「本質」を置く「自己意識」の「形態」が「登場」するのはやっと「不幸な意識」が初めてである。[即自的には]「不幸な意識そのものはある自己意識が他の自己意識のうちへ観る活きであるのであり，この意識そのものは両者であるのであり，そして両者の統一がこの意識には本質なのである」(164)。排拒された両項における対自の項に立ち，その項の内部の対自の極にのみ「本質」を置く従来の形態から解放され，

この両項の統一に立つこの形態は，「無限性」の境位における「自己意識」を初めて表現するものである。ところでこの形態が「みずから対自的にかかる本質である」(164) ことになるのだと語られ，この意識の経験の最後の結果において「不幸な意識にとってもまたこの普遍者との己れの統一が生成している」(178) と述べられていはする。しかし実態はそうではないことは良心論への叙述の過程がこれを示している。つまり意識深部への不可避的な下降が，そのように予定された統一の維持しえないほどの「意識」の亀裂を目撃させ，「精神の概念」をめぐるヘーゲルの格闘を新しい次元で開始させるのであるが，これの考察は本稿第三章の継承と共に別稿の課題である。

第三章　自己意識のレアリテートへの道

既にみられたように，「カテゴリー」としての本源的な「自己意識」が成立するための過程とは，「自己意識」が「レアリテート」になる過程であった。

> 理性はあらゆるレアリテートであるという意識の確信である —— 観念論は意識の確信の概念をこのように言明する。理性なりとして登場する意識がこうした確信をそれ自身に無媒介に具えているとすれば，観念論の方はこうした確信を無媒介に言明するのである。自我は自我である。この意味は，自我に対象であるところの自我が，自己意識一般における対象とも，自由な自己意識における対象とも違い，・・・他のどんなものも非存在であるという意識を伴った対象であるということであり，それは唯一の対象，あらゆるレアリテートにして現在であるということである。しかし自己意識がたんに対自的にのみでなく即自的にもあらゆるレアリテートであるのは，意識がこういうレアリテートに成ること，あるいはむしろそういうものとして意識が自ら証し立てすることを介して初めて生ずることである。 (179)

そしてこの「証し立て」はすでに「意識」と「自己意識」との階梯で成し遂げられているとされる。前者においては「即自的に［存在する］としての他的存在」が，後者においては「意識に対してのみ存在するかぎりの他的存在」が「意識自身に対して消失した」というのである (179f.)。ところでここに「他的存在」と表現されているものは経験的意識にとってはまさに「己れにとって真なるもの」であった。それがこの「意識自身に対して消失」するというのである。こうして意識のレアリテートへの道とは「絶望の道」(72) 以外ではありえない。しかも理性が「あらゆるレアリテートであるという意識の確信」であるからには，このことからもこの道は「己れを完遂するスケプティチスムス」であらざるをえない。ここに「己れを完遂するスケプティチスムス」とは，「真実にはむしろレアリジーレンされていない概念にすぎないものが，現象する知にとっては最高にレエルなものなのであり，そうした現象する知の非真理性を透見する」営為 (72) である。

しかし「他的存在」は「非存在」として意識に対して消失するのである。例えば非人間という語は人間においてしか述語されえない。そしてそれが述語されるときには，人間の真理 das Wahre を対抗的に守り bewahren これを開示し bewähren ようとする意志がそこに働いている

のである。これに似て，意識が他的存在を非存在と規定 be・stimmen するとき，他的存在として対象を立てた「意識」とこの他的存在の「存在」との合致 Ent・sprechen が — こうして他的存在の没落の中でその真理が — 語り出されているのである。つまり「他的存在」の意識に対する消失は，「意識」と「存在」との新しい次元への上昇・統一なのである。その次元がレアリテートなのである。

> 一方の側面では実在ないし真なるものは存在という規定を意識に対して持ち，他方の側面では実在ないし真なるものは意識に対してのみ存在するという規定を持つ。こういう二つの側面が相次いで登場した。しかし両者はひとつの真理に帰入した。存在するところのものないし即自は，それが意識に対して存在するかぎりにおいてのみ存在する，しかも意識に対して存在するところのものは即自的にも存在する，という真理がそれである。(180)

ここに提示された真理は，意識原理論でいわれる「意識自身の振り返りによって生成した新しい対象」つまり「この即自の，意識・に対する・存在，真なるもの」(79) である。この「新しい対象」は意識が己れの知と対象との合致しないことを目撃したとき発する言葉「自分にとって以前は即自であったところのものは即自的に存在するのではない」「それは自分に対してのみ即自的に存在していたにすぎない」(78) から生じてきたものであった。それは究極的には「己れにとって真なるもの」の喪失を嘆じ，己れの悲惨を告白する「不幸な意識」の絶望の発語である。経験的意識は『意識の経験の学』の著者にとっては根本的には「不幸な意識」そのものなのである。経験的意識が自覚的に己れの知と対象との Untersuchung であり Vergleichung であるなら，それ以外ではありえないことになる。ともあれ「探求」と「比較」の破綻の中での，「それは自分に対してのみ即自的に存在していたにすぎない」という悲痛な告白が「この即自の，意識・に対する・存在，真なるもの」つまりカテゴリー (*Aussage*) に転化する。こうして存在と自己意識の統一としてのヘーゲルのカテゴリーは経験的意識の没落の中でのみ（そして意識がこのことを自覚するならば）対自化される。ここで「意識に対する für」の〈für〉は両義的である。一方はいまだ客観性を意識が持ちえていないことを表示しており、他方は後述の意義を含んでいる。しかし叙述面に登場する経験的意識は，「不幸な意識」に至るまでは上の自覚を持っていない。こうして上記引用文の二つの命題，つまり「存在するものはそれが意識に対して存在するかぎりにおいてのみ存在する」，そしてこれを換位した，「しかも意識に対して存在するものは即自的にもまた存在する」，とはカテゴリーの「存在」を言明するものであり，カテゴリーの言明である。こうしたカテゴリーの確立していることが意識の確信となるには意識がある境位に到達して初めて可能となる。つまり，反復し継続する没落を通じて同時にその個別性をも止揚していく (Vgl.178) レアリテートへの道を，意識が遺漏なく完全に歩みきるという過程がその前提となる。これがカントとフィヒテに対するヘーゲルの批判の核心である。

さて「意識」が「レアリテート」と成った事態が「思惟する現実態」と規定されていることをわれわれは本稿第一章で確認した。それは「無限な意識の三位一体」(本稿第二章第一節)

の［a.］「即自が意識である」が対自化され，この三位一体全体が思惟として現実態を得たときのことである。このとき「存在」もこの同一な三位一体を「表現」するものとして現れている。ここでは「意識に対する für es」存在が即自であり，その逆でもある。この〈für〉は「前に」でありつつ同時に「適って，帰属して」であろう。こうした和解、適合の〈für〉は，次元は異なるが『Ⅷ　絶対知』においても現れる。例えば「精神的な意識にとっては，即自的に存在するところのものは，それが〈自己〉に対する存在でありかつ〈自己〉ないし概念の存在であるかぎりにおいてのみ存在する。」(584) というふうに。

「奴の意識」の最終段階に至って初めて，カテゴリーとしての和合にむけて（「意識」と区別された）「自己意識」はレアリテートへの道をそれとして歩み始める。これはカテゴリー論が自己意識論に課した課題である。しかしこの課題は叙述において充分に遂行されているだろうか。むしろこの課題のもとに自己意識論を拘束することによって，自己意識の展開が抽象化されてはいないか。「無限性」の統一が強固なこと，このことが逆に，（「形態」としての「自己意識」に対するヘーゲルの否定的な位置付けと相俟って），自己意識内部の深刻な亀裂を更に深く対象化していこうとする志向を抑圧していないか。そしてまた意識深部への不可避的な下降は，予想された論理世界をすでに喰い破りつつあるのではないだろうか。こうした問題を「精神の概念」をめぐるヘーゲルの格闘として追跡することは別稿の課題である。

注

＊1　本稿では文献(1)の章，節を『　』で，また引用頁数を（　）内に表示した。
＊2　原文の隔字体，あるいは筆者による強調は傍点を付してこれを表示した。
＊3　原文を筆者が省略した部分を・・・で示した。
＊4　筆者自身による註記は［　］で示した。

文　献

(1)　G. W. F. Hegel Werke in zwanzig Bänden　3　Phänomenologie des Geistes　Suhrkamp Verlag
(2)　佐々木寛治：『精神現象学における「自己 das Selbst」(1)――「自我」の哲学の突入』節一節（S 3-5）『中国短期大学紀要第21号』1990年，6月
(3)　同上，序（S 2-3）